審 査 の 結 果 の 要 旨

氏　名　長谷川　香

本論文は、近代東京における国家と天皇に関わる儀礼空間を都市的・建築的観点から分析することにより、明治以降の近代天皇制と、都市・建築との関係性の一端を明らかにする、建築史・都市史研究である。明治 2 年の東京遷都以降、公的な儀礼の中心は京都から東京へと移されることになった。とくに天皇に関わる儀礼は、近世までは京都における天皇家と結びついた伝統的な施設で催されてきたのに対し、近代東京における儀礼は、新たな敷地を見出し整備していく必要があった。本研究は、そうした観点にもとづき、「儀礼空間」を式場に建てられた建築のみならず、敷地全体、さらには式場に至るまでの経路一帯も含めた「面」的な拡がりをもった都市空間として捉え、その利用形態や地域一帯の整備について分析することで、近代東京における儀礼空間の全体像を明らかにしたものである。

本論は「序章」「第一章〜第六章」「結章」からなり、巻末に「初出一覧」を含む構成となっている。以下、各章の内容を概観する。

「序章」では、近代天皇制における儀礼の意義、近代天皇制と帝都・東京の形成、都市的観点から見る近代東京の儀礼空間、建築的観点から見る近代東京の儀礼空間という四つの観点から先行する研究状況を確認した上で、本研究の目的・方法・構成が論じられる。とくに本研究の目的としては、儀礼の会場及び経路から東京における儀礼空間の全体像を明らかにすること、建築的観点から儀礼空間の特質を明らかにすること、そして以上の都市的・建築的な儀礼空間の検証を通じて都市と儀礼の相互の影響関係について明らかにすることの三点があげられる。

第一章は、まず都市を舞台とする儀礼の分類と位置づけが行われる、本研究の重要な前提となる章である。宮中儀礼と行幸を伴う都市的な儀礼の性格の違いを明らかにするために、さまざまな儀礼の全体像が整理された上で、本論における独自の儀礼の分類が丁寧に説明される。明治 5 年から昭和 17 年までの無数の儀礼を資料に基づき 14 のカテゴリーに分類し、その上で、市民の関与の有無、行幸啓の有無、大規模な敷地利用の有無という三つの観点から、本研究で扱われ

る儀礼が選定された。これらの儀礼は祝賀儀礼、大喪儀、軍事儀礼の三つに大別され、第二章と第三章では祝賀儀礼、第四章では大喪儀、第五章では軍事儀礼について論じられる。

第二章は「祝賀儀礼Ⅰ」として、会場敷地や行幸啓経路の分析により、儀礼の都市的な拡がりが論じられる。ここでは21件の具体的な儀礼について、その会場や行幸経路が明らかにされた。その上で、会場敷地がどのように選定されたのか、また行幸啓における経路がどのように変遷し、またそれがいかに都市的な拡がりを有するものであったかが明らかにされた。

第三章は「祝賀儀礼Ⅱ」として、今度はその会場となった敷地に建設された御殿風の式殿建築のデザインについて分析される。本章では10件の具体的な儀礼がとりあげられ、それぞれ具体的な資料にもとづきながら、それらの式殿がどのような建築であったのが分析された。重要なのは、それらの式殿建築がいずれも、紫宸殿や大極殿に類似した建築様式によってデザインされていたことが明らかにされたことである。それは、単に建物のデザインの問題にとどまらず、儀礼の次第に対応して会場計画が標準化されていったことと連動して、式殿建築が様式化・標準化したものと結論づけられた。

第四章は「大喪儀」を扱う章である。本章で扱われた4件の大喪儀のうち、大正天皇大喪儀を除く 3 件は、御陵が京都に設けられたために東京と京都をまたぐ儀礼となり、また大正天皇大喪儀においても御陵は多摩に設けられたため、4件いずれの場合も鉄道という都市インフラ要素が、この儀礼と密接な関係を有していた。会場選定、葬送経路、葬場殿の分析に加え、会場計画と鉄道の仮停車場の関係性が、大喪儀と都市・建築空間においてはきわめて重要だったことが明らかにされた。

第五章は「軍事儀礼」を扱う章である。この章では観兵式の会場となった敷地の変遷に着目し、明治3年から昭和20年までの調査対象期間を五期に分けて分析が進められた。敷地は皇城内の本丸跡・皇城周辺、日比谷練兵場、青山練兵場、代々木練兵場、宮城前広場と変遷した。軍事儀礼においては主要な式殿建築は建設されなかったものの、行幸経路や会場計画において、他の儀礼と密接な関係を有していた。なかでも明治天皇大喪儀が催された青山練兵場では、敷地に葬送殿跡と中央の通路が残されたことから、以降は隊列がそれを避けるように組まれるようになったことを明らかにした点は、本研究の多面的な視野の重なり合いを示す重要な指摘であろう。

第六章は、ここまでの三つの性格の異なる儀礼の分析を横断的に捉えるために、明治神宮外苑造営と儀礼の関係を論じた章である。神宮外苑の造営前史として、軍事儀礼や大喪儀などの重要な儀礼の会場となった青山練兵場を捉え直すことで、第二章から第五章までの議論に、新たな視座をもたらすことに成功して

いる。

結章では、近代東京における儀礼と都市空間の関係性が、改めて第Ⅰ期〜第Ⅴ期の時代区分により整理され、「近代東京における儀礼空間の都市的拡がり」（第Ⅰ期〜第Ⅴ期）として図化された。これらの図は本研究の重要性をきわめて明瞭に示すものであり、本研究の結論の一端を明快に示すものになっている。

以上のように、本論は膨大かつ精緻な資料調査にもとづき、きわめてユニークな視点から近代東京論という正統的なテーマに迫ったものであり、建築史・都市史分野の研究としてきわめて重要な成果をあげたものである。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。

以　上